ギリギリヒーローズ

サルッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギリギリヒーローズ

【Ｎコード】
Ｎ５７６０Ｉ

【作者名】
サルッチ

【あらすじ】
普通の高校一年生、佐藤虔（さとうけん）。
特徴としては字が難しいぐらいだった彼にも「恋」の時期が訪れる。
しかし、その恋から彼の悪夢は始まっていた・・・。

（1）～序章～　日常が絶対とは限らない

「なんでもない一日になる」

そうあの日感じたのは、僕は日常のサイクルがそんなに簡単に崩れることは無いと信じきっていたからだ。

ただ、ちょっと違和感を感じただけだった。

「奴」の行動に・・・・・・。

（2）目覚ましの掛け忘れほど痛いものはない

９月１日　午前８時１０分。

僕は部屋の目覚まし時計は残酷な現実を突きつけられた。

この時間を見たとき僕の頭によぎったのは終わってない宿題と絶対に間に合わない朝練だった。（基本的に朝練には行かないタチなのだが・・・・・・）

この日にはおそらく自分は変われるという自信があった。夏休みの後。二学期初日。

この日はがらっと雰囲気の変わる奴とか、急に大人っぽく見えるようになる奴がいる。

「そんな奴らと同じように僕も変われるはずだ！」

・・・・・そう思い、「変わる」第一歩に朝練を選んだのだ。

そして８月３１日の夜には固い決意を持って眠った・・・・・・はずだった。

だがこの惨状。

腹立たしいのを通り越して笑えてくる。

原因は目覚まし時計のスイッチを入れ忘れるという固い決意にしてはあまりに初歩的で致命的なミスだった。

とにかく学校にさえ間に合えばいいという前夜の決意とは打って変わってハードルの低い目標を設定してベッドから跳ね起きた。

学校は走って１０分程度。
勝算はあると頭の中では思っているのだが、体は思うようには動いてくれない。

こんな体で本当に今日朝練なんかできたのだろうか・・・・・・そんな疑問も浮かんでくる。

まだ二学期初日にもかかわらず、まるで仕事に疲れたサラリーマンのようである。

「なんで目覚ましなんねぇんだよ」

原因は自分にあるにもかかわらずやりきれない気持ちで時計に悪態をついた。

無論、時計は返答してくれない。刻一刻と単調に時を刻むだけだ。

もう家には誰もいない。親父も母さんも兄貴もみんな仕事に出払っている。
平凡な４人家族。名前も平凡な「佐藤」。
日本で最も多い苗字の一つと言っても過言ではないだろう。

だが、あまりに平凡な名前に飽きた父が僕に与えた名前は「虔斗」。

なぜこんなに「けん」だけ難しい字にしたのかと父に尋ねたところ、

「そりゃ、お前、佐藤っていうどこにでもいそうな苗字の人間なんだよ、俺らは。
ただ俺はしゃれた名前はお前にあわない気がしたんだ。
だからせめて漢字ぐらい難しいのに、ってわざわざ漢和辞典まで出して決めてやったんだぞ。そもそも虔って字にはなぁ・・・・・・」

という返事が返ってきた。もちろん親父はこの後熱弁を振るったのだが、僕はここまでしか聞いていない。

覚えているのはこの返事をしているときの父の満足げな顔に「真の嫌悪」というのを感じたことだけだ。

なぜもう少し書きやすい字にしてくれなかったのかといつもテストの時、そして入学式の時いつも思う。

テストは名前にだけは時間を取られたくないもの。
にもかかわらず虔の字は書きにくいし、佐藤も漢字ではそんなに簡単じゃない。

子供を泣かせる親である。

ちなみに親父の名は「実」。

子供の苦労を知っているはずは・・・・・・ない。

そして入学式のとき。
小、中、高と「この漢字なんて読むの？」と担任に聞かれたのは僕

ぐらいではないだろうか。

なにはともあれ僕たちは裕福でも、貧乏でもないフツーの生活を送っている。

・・・・・さて、皆さん。お忘れかもしれないが今僕は遅刻するかしないかの瀬戸際に立っている。

支度をしてあわてて家を出たのが８時１４分。

登校時刻が８時２５分。

・・・・・五分五分だ。

（3）「奴」の登場により悪夢の幕は開く

そんな僕が通う学校は聖光学園。

比較的都心部から遠くない場所に位置し、交通の便も悪くない。最も僕のように家が近いものに関しては関係ない話だが。

レベルは県内トップクラス。おかげで僕は成績もギリギリである。

だが、「遅刻」はしてないので問題児扱いはされていない。「隠れ遅刻魔」といったところだろうか。

そんなことを頭の中で思っているとチャイムが鳴り、ざわついていた教室も静かになる。

僕の学校は始業式で全校集会はしない。時間の短縮のためという味気のない理由からだ。そのため、始業式と言ってもあまり特別な日という感覚はない。

だが、やはり二学期最初の日である。誰だって遅刻はしたくない。

が、遅刻を悪いことだと感じる感覚さえない人間がいる・・・・・・

「奴」だ。

別に僕は意識して遅刻ギリギリにきているわけじゃない。

みんなから毎日注目を浴びたくて、とかどっかに寄り道をしてて、とかっていうわけじゃない。でも、「奴」は違う。

「奴」は確実にこの時間(ギリギリ)を狙って教室に入りみんなの注目を浴び、僕の隣に座る。（おそらく寄り道もしている。）

そんな「奴」の名は石川純。端正な顔のくせにかなりのお調子者。もちろんモテる。

こんな奴を一括りの高校一年生とはみなして欲しくない。（名前の漢字の簡単さという観点からも一括りにして欲しくない。）

そんな「奴」は入ってきて僕を見るなり「おっはよう、ケンちゃん！今日もお互いぎりぎりだね！」

と人の思いも知らず「奴」は能天気な声で話しかけてきた。

そしてこの「！」マークがついているため御察しのことと思うが「奴」はとにかく朝でも夜でもテンションが高い人間だ。

もちろん僕は軽く手を上げただけでまともに応答はしなかった。

そんな「奴」と僕は幼なじみ。

言うまでもなく、隣にいる僕は全くといっても言いほど目立たなくなる。悲しいことに席もとなりである。

その目立たない僕は自分なりに表現すると「ハンバーグに添えてある野菜」、友達の表現によると「純を輝かせるライト」らしい。分っていただけるだろうか。

あのデパートにある宝石を輝かせるライトだ。商品を輝かせるのが目的という地味な奴。

そう、僕はもう周りからは完全にサポート役（地味な役？）という目でしか見られていない。
だが、そんなぼくらにはたいそうな名前がある。

「ギリギリヒーローズ」

遅刻ギリギリの二人組＝ギリギリヒーローズらしい。（ちなみにふたりとも成績もギリギリ）

なぜヒーローなのかはよく分らない。「とりあえず遅刻ギリギリで目立つ」というのが理由だろうか。（しつこいようだが、順位表でも目立つ）

しかし「奴」はともかくとしてなんで僕までヒーローなのかと思う。別に顔が良いわけでもなく、勉強もさっぱりでこれといった特徴があるわけではない。

ただ、やはり二人で一つとみなされているらしく、こういった名前がついた。

迷惑な幼なじみを持ったものだ。

「おい、そこ。二人で盛り上がってるんじゃない。それに石川！お前は遅刻だろ。ちゃんと職員室に行って来い！」と担任の山下が注意してきたが、別に盛り上がっているつもりはない。

すかさず「奴」は、「また～。そんな厳しいこと言わないでくださいよ。ほら、オレとケンちゃんギリギリヒーローズって呼ばれてるの知ってるっしょ。だから、ギリギリセーフってことで！」と調子

よく俺の肩を叩きながら言った。

この大バカに愛想を尽かしたのか山下はもうそれ以上は言わなかった。

一方、「奴」は勝利を確信したのか、僕にピースをした。

そして「奴」がピースするころにはＨＲが始まり二学期の初日が始まった。

（4）「奴」ｖｓ僕

秋とはいったい何のためにあるのか。

そう考えてみたことはないだろうか。

春の新鮮さは当の昔に過ぎ去り、夏のあのむさくるしいような太陽もない季節。

「秋」。これは勝手な僕の想像だが、秋とは何かが成就するような季節ではないのだろうか。

植物は秋に実りが訪れる。人間だって実りは訪れてもいいのではないだろうか。例えばスポーツにおいては気候的にも適した季節である。ウチの学校では高３が引退し、高２中心となった部活動は始まる時期だ。

僕の所属する陸上部も例外ではない。ウチの陸上部は県内屈指の強豪校。今年の夏は県大会で惜しくも敗れ、悲願の全国出場とはならなかった。

先輩方は悔し涙を流し、主将は最後にこう語った。

「俺たちはお前たちと一緒に部活ができてとても充実した一年を送ることができた。ただ、やはり心残りなのは全国に行けなかったことだ。俺はお前らと一緒に部活をしていてひとつ感じたことがある。それはお前らならきっとあの壁、県大会突破という壁を越えられるということだ。

来年の夏、絶対にここで俺たちの雪辱を晴らしてほしい。頼んだぞ！」

確かこんな内容だったと思う。（途中にかなりの嗚咽が混じっていたが・・・・・・）

さて、この言葉を受けた高２高３がどう思ったか推測していただきたい。

みんな気合が入り、「何が何でも全国に行く！」という気持ちになったなら良かったのだが、そんなに素直じゃないのがイマドキの高校生である。

あるものはこの言葉に鼓舞され、またあるものは厳しい先輩がいなくなり部活をサボるようになった。

現在、前主将の言ったことは半分しか当たっていないのである。（リアルな数字を言えば１２分の６）

さて、話を戻そう。先ほど秋は実りの季節と述べたが、なぜこのような部活の話をしたのかお分かりいただけただろうか。今、僕は部活において実りを望んでいるのだ。そして今日。その実りに向けて朝練をしようとした。（実際は寝坊をしたのだが・・・・・・）

しかしこの実りを迎える季節の前に実って（つぼみがついて？）しまったものがある。

それは・・・・・・

「ケンちゃん、ケンちゃん！」

時刻は１１時４５分。ちょうど今日最後の時限が終わったところである。

もちろん声の主は「奴」。皆さんには申し訳ないが、「奴」はどんなに無視をしてみも喋りかけてくるので会話をしてやるしかないのだ。

「何だよ、相変わらずテンションの高い奴だな」

「いいじゃん。俺とケンちゃんの仲だろう。まだよちよち歩きをしてたぐらいからの仲だよね。長い付き合いだよね～。ほんとに。そういえばケンちゃん幼稚園のときさ・・・・・・」

ずっと付き合ってはいるのだが、感動するぐらいこいつは一人でしゃべって話が逸れる。

そして僕は決まってこう相槌を打つ。

「話逸れてるよ、純。さっさと用件すませよ」

１０年間同じ相槌なので、打っているこっちのほうが飽きてくる。

「もう、ケンちゃん冷たいんだから。あんなに幼稚園のときは優しかったのに・・・・・・」

あまりに話がすすまなそうなので対「奴」用の冷たい視線をぶつけてみた。

「ゴメンってケンちゃん！そんなケダモノ見るような目で見ないでよ！」

効果覿面である。ちなみに「奴」は僕から見ればけだものとなんら変わりはない。

「・・・・・・で、何だよ」

「あぁっ、うん、・・・あれ？何だったっけ？？あっ、ケンちゃん待って！行かないで！！いま思い出してるから。えっと、う～ん・・・そうだ！！！」

このとき「奴」が飛び跳ね周りのみんなが驚いたが、全く気にする素振りを見せない。

「そう、昨日オレ見ちゃったんだ。へへへ」

・・・・・・こういうシチュエーションの時人間はどんな表情になるのだろうか。

あっ、失礼。こういうシチュエーションというのは自分に思い当たる節が有るときに上記のような言葉
をかけられたときのことである。（わかりにくいが簡単に言うと自分に何か隠し事があるときのことだ）

そう、僕にはそういう思い当たる節があるのだ。人間誰しも一つや二つ隠し事、もしくは秘密といったものがある。そして、その隠し事によって知られてもいい人間と知られたくない人間とがいるはずだ。
今回、最も知られたくない人間は・・・・・・・「奴」だ。

とにかく、ここで逃げても埒が明かないので、そのまま会話を続け

ることにした。

「何を？」

「ケンちゃんだよ！昨日帰りみちで誰かとあってなかった？」

「誰かとあってなかった？・・・・・・こいつは鎌をかけてきているのだろうか。」そう思い、とりあえず苦し紛れに言ってみる。

「誰か？あ～、兄貴？なんだよ、知ってんだろ兄貴のことぐらい。そんな遠まわしに言わなくても・・・」

「また～、そうやってウソつく！吐いちゃえば楽になるのに・・・・・」

・・・・・ヤバイ。

こいつはおそらく弱みを握っているのだ。

そして、ここまできて否定すると自分の傷口が広がる可能性がある。

「もう観念するしかないのか・・・・・・」そう思い口を開こうとしたそのとき、

「ケンちゃん昨日猫に話しかけてたでしょ！！」

・・・・・・えっ？？？あまりに予想外のこと一瞬思考が停止する。

確かに昨日猫には会ったが・・・・・・

「あれ？？反応うすいな～・・・他になんか隠してる？」

とりあえず、分ってないと踏んで話を合わせた。

「ん？あぁ、ゴメン。ちょっと考え事してた。黒猫だろ。すっげぇかわいくて、つい・・・・・・。」
実際会ったのは黒猫だった。

「へぇ、やっぱりケンちゃんだったんだ。・・・・・・変な趣味があったんだね！あっ、それともう一人・・・・・・」
どうにか切り抜けたと思ったがこのカウンター。
もう一人・・・・・完璧に人間のことを指している。もうダメだ。
そう思ったが、さらに幸運は続いた。

「お～い、純。ちょっと職員室まで来てくれないか？」
ＨＲ以外でめったに教室に顔を出さない担任の山下が現れ、しかもめったに職員室に呼ばれない純が呼ばれた。こんな幸運があるのだろうか。

ちなみにあいつはよく生徒指導の先生には呼ばれる。

「あっ、は～い。石川　純、呼ばれれば地の果てだって、職員室だってどこでもいきま～す！」

「職員室は地の果てと同等か？」そう「奴」の言葉に呆れている僕に向き直り「ごめん、ケンちゃん。ちょっと待ってて。すぐ戻るから。」と、「奴」は足早に教室を出て行った。
気付けば教室には誰もいない。僕は一人でこの幸運を噛み締めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5760i/

ギリギリヒーローズ

2010年10月11日13時07分発行